

清代の鍼灸 第3報～康熙年間その2～

兵庫 橋本典子

1. はじめに

演者は前回の本学術大会において「清代の鍼灸 第2報～康熙年間その1～」と題し、清代・康熙年間(1662～1722)中の1662年～1685年の医薬書にみえる鍼灸条文について調査報告を行った。その結果、鍼法138条文、灸法292条文、鍼灸17条文の計447条文である。

それぞれの施術対象、施術目的、施術方法を列記すると以下の通りである。鍼の施術対象は患部(できもの)が67箇所に対して、経穴や場所名の記載は38箇所で、順治年間の医薬書同様、手足を積極的に用いていた。他に出血を伴う施術は57条文。使用される鍼については『医宗説約』や『外科大成』にて、できものに対し「鍼鍼」「三稜鍼」「鋒鍼」の記載がみられるのみである。刺入深度は五分以下が4条文、6～9分が2条文、一寸以上が5条文である。

一方、灸法は10壮以下は105、11～99壮は31、100壮以上は17、七倍壮(二七壮、三七壮など)は63条文である。治療の対象は患部(できもの)が94箇所、対して穴や部位は155箇所である。特に体幹部や手足への施灸が多い。また主な隔物灸は隔蒜灸43条文、附子餅灸6条文などである。その一方で、明代には見られなかった蠅灸(黄蠅灸、蠅餅灸)や蟾酥餅灸、陽燧錠子餅灸、蝼蛄餅灸の記載がわずかだが認められる。

2. 対象資料と検討方法

今回は、康熙年間中の1686～1695年の医薬書にみえる鍼灸条文について調査を行う。

調査対象となる資料は、『新編中国中医古籍総目』(李鴻濤主編、中医古籍出版社、2023年)を参考に、康熙年間で版本が3種以上発刊されている医薬書(本草・痘疹分野を除く)とした。今回の対象資料は以下の通りである。

①『痧症全書』3巻(林森伝授、王凱編、1686年)、②『胎産指南』7巻・卷首1巻・卷末1巻(单養賢撰、1686年)、③『脈訣闡微』1巻(陳士鋒撰、1687年)、④『石室秘錄』6巻(陳士鋒撰、1687年)、⑤『辨証錄』14巻(陳士鋒撰、1687年)、⑥『晰微補化全書』2巻補遺1巻(林森伝授、王凱編、1675年)、⑦『証治滙補』8巻(李用粹撰、1687年)、⑧『經絡歌訣』1巻(汪昂撰、1689年)。⑨『食物本草会纂』12巻(沈李龍撰、1691年)、⑩『刪注脈訣規正』2巻(沈鏡撰、1693年)、⑪『湯頭歌訣』1巻(汪昂撰、1694年)、⑫『雜症大小合參』14巻(馮兆張撰、1694年)、⑬『洞天奧旨』16巻(陳士鋒撰、1694年)、⑭『行医八事図』1巻(丁雄飛撰、1695年)、⑮『張氏医通』16巻(張璐撰、1695年)、⑯『幼科鉄鏡』6巻(夏鼎撰、1695年)。

検討方法はこれまでと同様、鍼灸条文を抜き出し、1. 鍼法と灸法の条文の比率、2. 鍼法の内容:「鍼」「針」「刺」「砭」など鍼法に関する文字を含み、かつ明確に施術対象(穴など)があるもの(禁鍼条文も含む)、3. 灸法の内容:「灸」「艾」など灸法に関する文字を含み、かつ施術対象や壮数がみられるもの(禁灸条文も含む)の3点について調査する。